

## キュロスのテオドレトスにおける 「シリア語」問題再考

砂田 恭佑

### はじめに

古代末期の地中海世界において、ギリシア語・ラテン語といったローマ帝国の規範的言語は、徐々に口語と乖離して文章語としての性格を強めていった。それだけではなく、帝国の「辺境」地域では、それらを担う教養層・都市階層と、彼らとは異なる言語を口語として話す人々が接することもあった。このような状況に、キリスト教の浸透という宗教的・文化的現象が、この時代・地域に固有の特徴を与えることになる。というのも、キリスト教教会は聖書を奉じ、一つの組織として信徒に教えを広めることを目指すものであるからして、「辺境」地域で活動する聖職者は、本人が高い教育を受けたギリシア語・ラテン語の担い手であろうとも、住民の理解しうる言語の扱いに注意を向けざるを得なかったからである。例えばローマ領アフリカで生まれ活動したかのアウグスティヌスの著作からも、かかる歴史的状況を観察しうる<sup>1</sup>。もちろん教会人であれ住民であれ、かかる二言語使い分け(ダイグロシア)に直面する中で様々な態度を取った。

所を大きく東へ移して、キュロス主教テオドレトス(Θεοδώρητος; Theodōrētos, c. 393–c. 458CE)<sup>2</sup>は、シリア地域においてもかかる状況がみられたことの証人とみなされてきた。彼はアンティオキア(現アンタキヤ、トルコ)に生まれ、アパメイア(現カルア・アル＝ムディーク遺跡、シリア)の修道院で青年期を過ごし、30歳ごろにキュロス(アレppo北西、現在はトルコとシリアの国境に位置)の主教に叙階された人物である。生涯を通じてシリア地域で活動した彼は、多様な著作の全てを文語的なギリシア語で著わしたが、同時にシリア語話者たる地元の修道士たちとも関わりを持ち、彼らを称揚する伝記をもギリシア語で著している。シリア語とは、ヘブライ語と同じ北西セム諸語に属するアラム語の、特にエデッサ方言のことを指し、紀元前後から口語・碑文語として用いられたのに加え、キリスト教文学語としても発展し、4世紀から7世紀にかけて最盛期をみた<sup>3</sup>。テオドレトスの時代のローマ領シリアでは、主に農村など周縁部において用いられていたと考えられている<sup>4</sup>。さて、その彼について、Canivetはこう評する。

テオドレトスの家族はアンティオキア人で、しかしギリシア人家系では恐らくなかった。

テオドレトスの文体の純粹さと正確さは、その母語 (*langue maternelle*) がシリア語でありギリシア語を文語として修得したという考えに至らせる。……

アラム語のルーツをもつにしても、彼は二重話者 (*bilingue*) であって、その民族語 (*leur langue nationale*) よりもギリシア語でよりよく話すこれらのギリシア語を話すシリア人の中に位置付けられるべきである。その限りで、テオドレトスは傾きつつある文化、民衆的で実的な言語との接触のため徐々に変化していくギリシア語の純粹性の最後の偉大な証人の一人に留まっているのである<sup>5</sup>。

テオドレトスの母語がシリア語である、という判断を基軸とし、「民族語」<sup>6</sup> やギリシア語の「純粹性」といった文学の語彙を用いることで、Canivet はテオドレトスの著作をギリシア語文学・文献史上の重大局面に置こうとする。この評価が真ならば、テオドレトスが残した重要な著作群の理解に関わるだけではなく、非ギリシア語話者がギリシア語を選択的に学習し、著述によってギリシア教父としての名を遺したことになり、文化史・言語史・キリスト教史全般に興味深い材料を提供することになる。事実、ギリシア教父の中に、テオドレトスと同じような経歴を持つ人物は見出されない<sup>7</sup>。

この「テオドレトス＝シリア語母語話者説」に従う者は少なくない<sup>8</sup>。これに対して Millar が異論を唱え、主にシリアにおける言語史的状況を検討したうえで、テオドレトスにとり「最も重要な言語」はギリシア語であったと結論付けた。彼は「母語」という証明不可能な問題を賢明に回避してかかる結論を出した。しかし筆者は、問題の本質は変わらないと考える<sup>9</sup>。というのも、母語と言った場合、特に人為的な学習なしに当該言語を理解しうるものが含意される。とすると、シリア語を話す修道士たちとのつながり (後述) やそれに基づく思考を何らかの形で保ったままギリシア語を学習したことになる。しかしそうではないとすれば、シリア語を話すために意識的に努力し、前述した人々とのつながりも、当然意志に基づいて構築したことになるわけである。ゆえに問題の初めは母語の如何であっても、帰結するところはテオドレトスが選択的に学習・使用しそれとの親密さを獲得しようとしたのはシリア語とギリシア語のいずれだったのか、という問いとなろう。問題は言語文化史からテオドレトスという著者の人物像、著述の意図へと移る。

Millar の下す結論が正しければ、Canivet らの記述には再検討が必要になる。他方で、Canivet 説が根拠としてきたテオドレトス自身によるシリア語およびその話者との関わりをめぐる記述を再検討することに、Millar はさほどページを割いていないため、議論が全く逆転したとは言えない状況にある。争点が必ずしも一致していないのである。

ここで言語に関連する諸概念を整理しよう。Parmentier や Stählin、Festa から Canivet に至るまで<sup>10</sup>、問題はテオドレトスの「母語」がシリア語なのかギリシア語なのかという点にあった。さらにそれは彼のギリシア語が、その特徴から、学習言語であると判断できるという意見と抱き合わせになっていた。ところで「母語」とはここで何を意味するのであろうか。言語学の観点からは、母語とは母親あるいはその他成人から自然に習得する言語の変種であると定義される。これに二次的な学習言語が対置される。これに対し、話し手がそれによって考え、もっとも自然に使える言語は「優勢言語」(dominant language)と呼ばれ、さらに母語とは別に「生得言語」<sup>11</sup>(native language)という概念が指定される。これはある人にとって子供のころに習得して、語句の使い方や文が正しいかどうか、直観的に判断のつく言語であるとされる<sup>12</sup>。当然両者が一致するとは限らないし、生得言語を二つ以上有していることもありうる。

さて、テオドレトスの場合何が問題になるだろうか。上述した論者たちはあくまで「母語」と二次的な学習言語について記述したが、例えば Canivet はシリア語を話す修道士との交流や選択的なギリシア語習得を重く見たわけで、本人はその概念を導入していないにせよ、テオドレトスがシリア語を母語かつ生得言語として操ったこと、同時に二次的な学習言語としてギリシア語を十分に習得していたことを強調するように見える。また Guinot はその問題を聖書釈義と関連付けて考察し、テオドレトスはシリア語を直接理解できた、すなわち生得言語としていたとする<sup>13</sup>。対して Millar はあくまでギリシア語が彼にとって優勢言語であると主張し、シリア語の重視に反対した。前者二人は、テオドレトスがシリア語を「最も優れて習得していた生得言語」として用いていたと結論付け、さらにその理由としてそれが「母語」であったと措定する。そしてギリシア語を選択的学習により獲得したものとみなすわけである。対して Millar は別の観点から、初めからギリシア語が優勢言語であったと反論しているのである。

これらを受けて本稿はまず、Canivet らの挙げる史料が、その結論の根拠となりうるかどうかを検証する。先取りして言えば、それはかなり疑わしい、という分析結果が得られる。そこで章を改め、Millar の結論からさらに踏み込んで、ギリシア語を優勢言語としていたテオドレトスが、生得言語と言えるまで習得していたかどうか疑問符のつくシリア語にかくも積極的に言及したのはなぜか、という正反対の観点から考察を進める。最後に、言語やアイデンティティーをめぐる切り分けが、歴史的な事象を考察するうえでいかなる影響を与えうるかを附言したうえで、テオドレトスの著作における「シリア語」への言及が、素朴なものとしてではなく、むしろ著者の戦略的な意図と密接に関連していることを明らかにしたい。

## 1. テオドレトスのシリア語に関する自己証言

前述した通り、Canivetは「テオドレトス＝シリア語母語話者説」を示すにあたり、テオドレトスの著作のうちから三つを根拠として示している。1.『ギリシア病の治癒』5巻75節。2.『敬神者列伝』におけるシリア語修士との交流の記録。3. 聖書釈義におけるシリア語の利用。以上である。Canivetによるこれらの証言への評価はその後もしばしば踏襲されてきた。本稿でも同じ順番で検討を進め、4点目としてCanivetが挙げるもののうち著作以外の根拠、すなわちテオドレトスのギリシア語の精確性について手短かに考察することとする。

### 1.1. 『ギリシア病の治癒』における証言

『ギリシア病の治癒』(*Graecarum affectionum curatio*, 以下『治癒』)はテオドレトスが修道院で学んでいた時期の、つまり最初期の著作である。アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』(*Stromata*)や、エウセビオス『福音の準備』(*Praeparatio evangelica*)の伝統を継ぐ、ギリシア語の「異教」古典の引用を数多く散りばめた護教論である。全12巻から成り、各巻ごとに主題が定められている。問題の一節は5巻「人間本性について」の末尾近くに現れる。当該巻を通したテオドレトスの意図は、ギリシア古典における哲学者、詩人、弁論家等の人間観が、キリスト教のそれよりも優れているわけではなく、それはそもそも人間の本性が一つであることに基づくのだ、という事実を示すことにある。インド人、ペルシア人、アラブ人、エジプト人、そしてローマ人(ラテン語話者)がそれぞれの言語でギリシア人に劣らない知的活動をする<sup>14</sup>、と一通り述べたあと、テオドレトスはこう続ける。

私が以上のことを語るのは、ギリシアの言葉(ギリシア語)——私がいくらかの程度与った言葉——を貶めんがためでも、それに仇なすような〔形で〕養育費を返済せんがためでもなく、むしろ……(以下略)<sup>15</sup>

「それに叛くような〔形で〕養育費を返済」という箇所は訳すのが難しいが、要するに、ギリシア語教育から受けてきた恩に対する報いとして、それに仇なすような言説を提出することが目的ではない、というのが彼の言わんとするところであろう。続く箇所では、自身の意図はむしろギリシア語文芸を誇示する人々に異議を呈することなのだ、という趣旨の文章が続く。イタリアの古典文献学者で、『治癒』の校訂・翻訳を手掛けた Festa は ἀμυγῆπη(拙訳では「いくらかの程度」)を bene o male と訳したうえで反語的謙遜の表現(espressione d'ironica modestia)とし、テオドレトスというギリシア語の「洗礼名」と併せて、ギリシア語を幼児期から用いてき

た証とみなした<sup>16</sup>。これに対し Canivet は、ギリシア語名が洗礼名であるという保証はなく、テオドレトスが言わんとしているのは単に自分がギリシア語を二次的に学習したということに過ぎないとした<sup>17</sup>。Canivet が特に根拠としているのは、「与っている」(μετέλαχον) や「養育費」(τροφεία) といった語彙であると思われる。彼によれば、Festa は本文にそれが有していない意味を与えている。Canivet 以前には『教会史』を校訂した Parmentier が<sup>18</sup>、以降には Guinot が Canivet と同様の読解を提示する<sup>19</sup>。

Urbainczyk は Festa の名にも Canivet のそれにも触れずにこの一節を考察し、ギリシア語が母語であるという証言ともそうではないという反語的表現とも取れるとする。さらに、「ギリシア(の言葉)」(Ἑλλάδα) という単語に「異教の」という別の意味を含意させることで、ギリシア語使用者たるテオドレトスが異教徒に対し心情的に歩み寄ろうとしていることが読み取れることから、この一節はギリシア語が彼の第二言語であることを証明せず、彼がシリア語とギリシア語両方に堪能であったことを示すに過ぎない、と結論付けている<sup>20</sup>。

少なくとも Festa と Canivet は、この一節が反語的表現であるかどうか、そしてテオドレトスがギリシア語を学習言語とみなしている証拠として用いるか、という問題を検討するのに十分な根拠を示していない。筆者がまず確認したいのは、この一節は、各言語によって等しく知的活動ができる、という論旨の一部であるということである。テオドレトスはそれを論証するのにプラトンやヘロドトスといったギリシア古典の引用をもってする。それに続けて自身の言語事情に言及するとすれば、まず言及すべきは、母語かどうかはさておきそれによってもっともよく知的活動しうる優勢言語であろう。そうでなければ、各言語によって等しく知的活動ができるという論旨の中で自身の使用言語に言及する意味はない。その意味で、ここを根拠にテオドレトスの母語 (lingua materna) はギリシア語であったとまで言い切った Festa は勇み足であった<sup>21</sup>。他方でこれをギリシア語が学習言語であった証拠とする Canivet の説が説得力を持つとは思われない。彼の言うように、この言及がテオドレトスにとりギリシア語が学んで知った第二言語であるという、謙虚な言明だとすれば、養育費云々という文章を中心とする論旨の全体が修辭的説得力を失ってしまうのではないだろうか。ここでテオドレトスがギリシア語以外の各言語に対しては報告者として<sup>22</sup>、ギリシア語に対しては当事者として自己を描出しようとしていることは明瞭である。そうであるからこそ、つまりギリシア語と自身との特別な関係を前提としてこそ、その恩を仇で返すような真似がしたいわけではない、という但し書きが内部からの警告者の言葉として説得力を持つように思われる。

傍証を二つ挙げよう。まず、管見の限り誰も指摘していないことだが、「それに仇なすような〔形で〕養育費を返済せんがためでもなく」という表現は、明らかにプラトン『国家』7巻の表

現を念頭に置いている。7巻といえば有名な洞窟の比喩である。太陽を仰ぎ見た哲学者たちに洞窟へ降りてきて統治してもらうのは、哲学者に対する不当な要求なのではないか、と懸念するグラウコンに対し、ソクラテスは、確かによその国の哲学者なら「それぞれの国制の意志とは無関係に、ひとりでにそういう人間となったのであって、ひとりでに生まれたものが、誰からも養育の恩を受けていない以上、すすんで養育費を誰にも返済しようという気にもならないのは、当然のことだ<sup>23</sup>と答える。しかし国を挙げて哲学者を育成する「理想国家」ならばそうとはいえない、正当にも降りてきてもらって正しい統治がなされるべきである、と論が続くのである<sup>24</sup>。ここでテオドレトスの文章に目を戻そう。元の文脈を踏まえる限り、ギリシア語の学知に充分養われてきた自分が人間本性の等しさとギリシア語の非特権性を語るのは、それを貶めて恩を仇で返すのを意図しているわけではない、という含意がまずは読み取れる。さらにプラトンの表現を自在に借用できる技量から、上述の下線部分が証明されるという二重の含意があると考えられるのである。ここにギリシア語への肩入れを強調する意図は読み取れても、それを緩和する意図は読み取れない。

第二の傍証は、これもまた——驚くべきことに——管見の限り誰も指摘していないことだが、テオドレトスが列挙する各言語の中にシリア語が無い、ということである。テオドレトスの母語がシリア語であったならば、諸言語の平等性を証明するために格好の材料であったはずで、それを無視してギリシア語にのみ言及する理由は考えられない。Canivetの考えでは「与っている」「養育費」という語彙に「育ての親」という含意を読み取るべきだということになるのだろうが、その場合、「生みの親」にあたるシリア語への言及が周辺にないことは奇妙というしかない。

## 1.2. 『敬神者列伝』における証言

『敬神者列伝』(*Historia religiosa*)の検討に移ろう。この著作はシリアの修道士たちの伝記であり、440年に著わされた<sup>25</sup>。同著にはテオドレトスがシリア語話者の修道士と会話できたことを示す証言が多数残されている。Canivetが依拠するのは修道士マケドニオスの事例であり、最も有名なものでもあろう。この人物はテオドレトスの母親の霊的相談者であった<sup>26</sup>。テオドレトスという名前も彼から与えられたものであり、そのこと自体マケドニオスとの親しい会話から知ったことであったと彼自身が証言している<sup>27</sup>。実際にこの事例は注目に値する。それは、別の事件から知られているマケドニオスとシリア語との関係による。387年、推定によればテオドレトス生誕の数年前となるが、増税に不満を抱いたアンティオキア市民たちによる皇帝像引き倒し事件に際して、マケドニオスはアンティオキア市民の許しを請うため、皇帝側の役人へ

の嘆願を通常用いられるギリシア語ではなくシリア語で行った、というのである<sup>28</sup>。かかる人物と深い関係を持つのに、何らかのシリア語能力は当然想定されよう。もっとも Millar はマケドニオスがギリシア語を「話さなかったのか、話せなかったのか」という問題に注意を促している<sup>29</sup>。

マケドニオスの例に限らず、テオドレトスがシリアの修道士たちとシリア語で交流しえたことには一定の蓋然性がある<sup>30</sup>。別箇所の記述に信を置けば、ある夜テオドレトスの夢に現れた悪魔はシリア語で語りかけてきたという<sup>31</sup>。これはテオドレトスがシリア語に相当親しんでいたという証とみなしうる<sup>32</sup>。他方で、わざわざそう記述していることは、普段夢に現れる対象はギリシア語で話していた、ということを暗示するともいえよう。さらにこの悪魔がテオドレトスから教化（裏を返せば迫害）を受けていた「異端」マルキオン派の者であった、という事実にも注目すべきであろう。ここで登場するシリア語には、「異端」を操る悪魔の意図を看破する役割があり、素朴に話し言葉として現れているわけではない。

いずれにせよ、『敬神者列伝』中の事例をもってテオドレトスの母語を判断しうるかどうかは疑わしい。確かに、テオドレトスの母もまたシリア語修道士と交流を持っていたという事実は、母語を考えるうえで重要であろう。しかしシリア語の語彙をしばしばギリシア文字で記し意味を説明するテオドレトス本人はともかく、その母親のシリア語能力を判断できるだけの材料は著作から抽出できない。例えばその霊的相談が通訳を介したものであったとしても、その親密さを強調しようとする立場のテオドレトスがそれを書き飛ばさなかった保証はない。また後述する通り、『敬神者列伝』の叙述には、テオドレトスとシリア・キリスト教文化との親密さを強調する意図が広く認められる。してみれば、テオドレトス自身と彼が『敬神者列伝』において示すシリア語（話者）との関わりを母語の問題に帰着させることは有効だとは言い難い。分析方法にも結論の妥当性にも問題があるからである。

### 1.3. 聖書釈義におけるシリア語の利用

テオドレトスは、古代末期の代表的な聖書釈義学派の一つである「アンティオキア派」に属するため、聖書註解における記述も注目される。Canivet は『エレミヤ書註解』等でテオドレトスが「シリア語聖書」<sup>33</sup> を用いて釈義していることを自説の根拠とする<sup>34</sup>。Guinot も Canivet のシリア語母語説を採り、シリア語援用をひろく調査しつつも異論は提示しない<sup>35</sup>。最も懐疑的な Millar も、『ダニエル書註解』から 2 例、『詩篇註解』および『創世記質疑集』から 1 例ずつを引用し、それらからテオドレトスのシリア語の語彙と文法に関する知識は十分であったことがわかる、と判断している<sup>36</sup>。

彼らはテオドレトスの聖書積義を構成する一つの特徴——シリア語への言及——の背景に、テオドレトスが元々持っていた言語的アイデンティティーを見る点で共通する。しかし本稿では、敢えて異論を提出したい。まず指摘できるのは、ここまでに挙げた論者が引く例のうち、『創世記質疑集』のそれを除くほとんど全ての箇所がシリア語とヘブライ語とを併記している、という事実である。つまりほかならぬシリア語ではこう説明できる、というのではなく、ヘブライ語でもシリア語でもそう説明できる、という積義なのである。既に3世紀の時点でオリゲネスが旧約聖書のヘブライ語本文と七十人訳およびその他ギリシア語訳本文を並べた『六欄聖書』(Hexapla)を作成していた。テオドレトスはヘブライ語を読解する能力を持たなかったから<sup>37</sup>、それに関する情報は『六欄聖書』の写しかそれを用いた書物から間接的に知ったと考えられる。こうした背景を踏まえると、まずある箇所に関してヘブライ語での読みの情報を得て、シリア語でもそうであるのか否か、と周囲の人物に確認するだけでも、両語を並べてこれに言及する積義を書くことは不可能ではないことになる。シリア語に加えて他ギリシア語訳(アクイラ訳、シュンマコス訳、テオドティオン訳)とヘブライ語を並べて言及する箇所に至っては、なおさら証言としての価値は低いと言える。テオドレトスがシリア語に言及する回数を数え上げたところで、それを根拠にそのシリア語能力を評価することはできないのである。そのためにはむしろ、シリア語本文それ自体の意味が参照されている箇所を考察せねばならない。

そこで該当する箇所を検討しよう。とはいえ彼の積義書は膨大であるから、ここでは『詩篇註解』を分析対象とする。年代は444年頃のものとして推定され、彼が著した註解書の中ではほぼ中期に属する。註解対象である旧約聖書『詩篇』は元々詩歌の集成であり、キリスト教徒の間でも七十人訳ギリシア語訳で歌われた。自然その句は人口に膾炙するところとなった。テオドレトス自身、註解の序文で修道士や俗人を問わずだれでも詩篇に親しんでいる旨を述べている<sup>38</sup>。主教叙階以前に修道院で過ごしたことがあるテオドレトスも、その母語がシリア語だと仮定すれば、シリア語のフレーズに親しんでおり、それを積義に活かしたことが期待されよう。

Guinotはその補遺において、テオドレトスがシリア語の本文を伝える箇所として40(41)篇2節、59(60)篇10節、67(68)篇3節、112(113)篇1節、115篇1節(116篇10節)、118(119)篇63節を挙げているが<sup>39</sup>、これに103(104)篇26節(1704C)、80(81)篇16節(1528A)の2箇所を補足するべきであると思われる。これらは2例を除いて他の多くの版と併記されたものであり、重要な異読を伝えるテキストのうちの一つでしかなかった。一例を挙げれば第40篇2節では、七十人訳としてまず掲げられた「貧しく卑しい者に寄り添う者は幸いである」の「卑しい者」(καὶ πένητα)をテオドレトスは削除しようとするが、その際、いくつかの写本にも、ヘブライ語版、シリア語訳、そして他ギリシア語訳にも当箇所が欠けていることを根拠として挙げ

ている。

これに対し、以下の2箇所ではシリア語は重要な役割を果たす。

一つ目は、Millarも引用した80(81)篇16節註解である。テオドレトスは、この節に含まれる「時宜」(καιρός)という語について、ヘブライ語とシリア語ではそれにあたる語で「災厄」(συμφοραί)を意味する習慣があると説明する<sup>40</sup>。マソラ・テキストで該当するヘブライ語は $\text{עַת}$  ('et)となっており、これは修飾語を伴って「(裁きの)時」を意味した<sup>41</sup>。シリア語について言えば、テオドレトスは具体的に単語を挙げておらず、ペシッタ訳聖書は「震え」「動揺」を意味する  $\text{ܙܘܳܐܳܝ}$  (zaw'a) という語をあてている。テオドレトスが言及しているのはおそらく  $\text{ܕܰܢܳܐܳܝܳܢܳܐ}$  ('eddānā)と思われ、こちらの語は転義的に「(死の)時」をも意味した<sup>42</sup>。テオドレトスは両語のかかる含意をギリシア語の  $\text{συμφοραί}$  で説明したものと考えられる。彼の釈義は当節の文脈にもそぐう。

今一つの箇所は第118(119)篇63節註解である。そこでテオドレトスは、「わたしはあなたを畏れる者たちの、あなたの掟を守る者たちの仲間(μέτοχος)である」のうち、「仲間」にあたる語がシュンマコス訳では「つながれた者」(συνημμένος)シリア語では「友」(φίλος)と訳されていることを補足する<sup>43</sup>。実際、ペシッタ版シリア語聖書においてこの語は  $\text{ܪܳܗܳܡܳܐ}$  (rāhmā)「友」と訳されている。上記の二つの異訳を挙げたのちに、テオドレトスは第138(139)篇17節「私にとってあなたの友たち(φίλοι)は大いに名誉とされました、神よ、彼らの支配は大いに強められました」という句を引用して当詩句と関連付ける。特にシリア語訳が示されたのはこの句との関連を強めるためであろう。

このように見ると、テオドレトスがシリア語本文を、その他大勢の一つとしてではなく、それ自体として活用した釈義はただの2箇所に限られることが解る。しかもその2例ですら、著作全体がそうであるとはいえ、言及はきわめて簡潔に留まる。テオドレトスの聖書註解を考察する研究者の間でとりわけシリア語母語説が受容されていたことは既に述べた。このために、テオドレトスのシリア語使用は彼の生得言語の自然な発露とみなされてきたわけである。しかるにそれにしてはシリア語利用の痕跡が貧弱にすぎると言わねばなるまい。

最後に、『創世記質疑集』の記述にも言及する必要がある。本書は創世記からルツ記に至る旧約聖書初めの八書に関する想定問答を集めた『八書質疑集』(*Quaestiones in Octateuchum*)のうち初めの一書で、453年、すなわちテオドレトス最晩年の著作であることが解っている。テオドレトスは、その第60問題「どの言語が最も古いのか?」という想定質問に対して、旧約聖書に登場する人物たちの名前がシリア語で解釈できることから、シリア語が最古の言語であると回答している<sup>44</sup>。CregoとMillarはこの箇所をそのシリア語に対する親密性の証左として引用

する<sup>45</sup>。なるほど、最古の言語としてヘブライ語を想定する一般的な教父の伝統にあって、彼の記述は一見奇異であり、シリア語への際立った愛着を示すものと解釈できそうである。また Crego が評する通り、自身の管轄区の信徒の利益を見越していたかもしれない<sup>46</sup>。しかし以下に見るように、シリア語（およびその話者）に対する態度だけをその動機とはみなせない。

シリア語が世界最古の言語であるとする、ヘブライ語とは何なのか、という疑問を当時の読者が抱くことは想定できたようで、続く第 61 問題においてテオドレトスは、ヘブライ語を特別に扱うことで解決を図っている。彼によれば、ユダヤ人はヘブライ語ではなく各々が生まれた土地の言語を母語とする。他方でヘブライ語は、彼らに後から教え込まれる「聖なる言語」である<sup>47</sup>。これらはヘブライ語がもはや口語として絶滅した古代末期の実情に沿った説明といえよう。以上<sup>48</sup>のような観点からヘブライ語の問題が解決されるとともに、第 60 問題でテオドレトスが想定していた「世界最古の言語」とは実は「世界最古の話し言葉」のことであったことが判明する。もちろん、現代の知見に即して言えば、旧約聖書の人物の名前は言うまでもなくヘブライ語で解釈すべきであり、テオドレトスがこれをシリア語で理解したのは彼のヘブライ語に対する無知のためである。第 60 問題、第 61 問題ともに、ヘブライ語を「聖なる言語」として特権的に扱い、更にいえば等閑に付すことでテオドレトスの主張は成立していたのである。このことを念頭に置けば、テオドレトスによる一連の「シリア語礼賛」は、時代・地域とテオドレトスの知的制約を背景として初めて成立したものであることがわかる。「母語」への愛着のみに基づいて説明すべき事柄ではないのである<sup>49</sup>。

#### 1.4. 古典ギリシア語の純粋性

Canivet およびそれ以前の研究者たちは、テオドレトスが操った古典ギリシア語の高度な文体を、非母語話者による学習によるものとした。確かにテオドレトスの文体については、9 世紀の文人・聖職者フォティオス以来高い評価が寄せられている<sup>50</sup>。ここでいう高度な文体とは、古典期（前 5-4 世紀）のアッティカ方言に基づく語法、文法や語彙の精確性、修辭的表現などを指し、より口語に近い文体と対比される。Crego がほのめかすように<sup>51</sup>、このような文体は「第二ソフィスト運動」と呼ばれる流れに位置付けられる。これにより、ローマ帝国支配下で政治的主導権を失い、より口語に近いコイネー・ギリシア語が普及していたギリシア語圏で、一種の擬古文が復活したのである。それに伴って各都市公認のソフィスト（修辭学教師）による修辭学教育の規格化と弁論文化の隆盛が起り、後 4 世紀以降はキリスト教知識人も様々な葛藤とともにその恩恵に浴した。そしてアレクサンドロス以来のヘレニズムの伝統を継ぐアンティオキアは、4 世紀末におけるこの思潮の核の一つであった。アンティオキアで修辭学教師を務めた

リバニオスはテオドレトスにとって「アンティオキア派」の先人であるヨアンネス・クリュノストモス (347 頃-407) やモプスエスティアのテオドロス (350 頃-428) をも教えた。

確かにギリシア語文献学の観点からテオドレトスの文体を分析したとき、そこに二次的な学習の痕跡を読み取ること自体は否定できない。しかしそこで想定すべきは、まず口語ギリシア語に対する文語ギリシア語という「二次」性であって、非ギリシア語に対するギリシア語のそれではなからう。前者の可能性を排除して、いきなり母語としてのシリア語と学習言語としてのギリシア語を対比するのは論理の飛躍である。新約聖書において指摘されるようなセム語的特徴はテオドレトスの文体に認められないし、そのことを指摘する論者も管見の限り存在しない。

### 1.5. 小括

断続的にシリア語母語説の根拠として妥当性が議論されてきた『治癒』の一節は、むしろテオドレトスが持っていたギリシア語に対する親近性を示すものであり、それが後天的な学習言語だったという事実の妥当な根拠にはなりえない。『敬神者列伝』および諸々の聖書註解書における記述は、それ自体彼のシリア語に対する知識を証明するものであるとはいえ、より詳細に検討してみるとむしろぎこちなさが伺える。いやむしろ、ぎこちないながらもシリア語に言及しようとするテオドレトス像すら浮かび上がってくる。『詩篇註解』からは、シリア語詩篇が流暢に頭に浮かぶわけでもないのに、本文の意味を確定する作業のためにシリア語版を活用しようとしている註解者の像が描き出せよう。このシリア語知識の中途半端さを、彼のごく幼少期の母語の知識が、後から学んだギリシア語の知識により塗り替えられ、生得言語・優勢言語としての地位を失った結果として見ることも不可能ではない<sup>52</sup>。しかしそうであるなら、シリア語母語説を主張する意味はほとんどなくなってしまうだろう。いずれにしても、以上の証言が十分な根拠あるいは正当性を持っているとは認めがたい。

以上、ややもすれば瑣末ともいえる問題を慎重に検討してきた。テオドレトスにとってシリア語が母語ではないか、仮にそうだったとしても彼の知的活動にさしたる影響を与えない程度のものであったとすれば、むしろ新たな問題となるのはシリア語への積極的な言及の動機であろう。次章ではその点を検証することとしよう。

## 2. テオドレトスのシリア語への「接近」

1章で検討した諸史料を年代順に並べてみると、『治癒』(423年) → 『敬神者列伝』(440年) → 『詩篇註解』(440年代) → 『創世記質疑集』(453年)となる。ことに本稿の主題に注目してみれば

ば、テオドレトスは、最も早い『治癒』ではシリア語に言及せず自身のギリシア語の習得を強調していたが、シリアの修道士たちの伝記ではシリア語世界への親近性を喧伝し、『詩篇註解』その他の註解書では稀にシリア語に言及しつつ、最晩年にはついにシリア語が世界最古の口語であるとまで宣言するに至った、という図式が描ける。すると、前節の終わりに提示した問いを発展させて、テオドレトスが徐々にシリア語に積極的に言及するようになったのはなぜかを問う必要がある。そこでまずはテオドレトスが置かれていた文化史・教会史的状况を概観したのちに、テオドレトスの著作を独自の観点から分析した Sillett の研究を踏まえ、そのシリア語あるいはシリア文化への態度が何を示しているのかを明らかにすることとしたい。

## 2.1. 歴史的背景

言語・文化の観点からシリア地域を見た場合、ギリシア語とシリア語の二重性が一般に強調される。しかし個人として両語を自由に使いこなす人々が多数を占めたというのではなく、それぞれの話者層は別々に存在していた<sup>53</sup>。都市部ではギリシア語、農村部ではシリア語、というのが一般的な理解ではあるが、シリアの中にも地域差が存在した。Millar の見立てでは、エウフラテス川（ユーフラテス川）以東では古来より広くシリア語が用いられ、4世紀以降シリア語に基づくシリア・キリスト教文化が急速に発展したが、それが以西に進出したのはあくまで5世紀中ごろ以降のことであり、アンティオキアを中心とする北シリアでは農村部においても——碑文史料が示すところでは——ギリシア語話者がほとんどを占めていた<sup>54</sup>。前述の通り、アンティオキアはヘレニズムの伝統と強く結びついていた。加えてそこは、ローマ帝国東方でペルシアと接するオリエンズ管区<sup>55</sup>の中心地域でもあった。

4世紀以降のシリアを、キリスト教に関わる観点からも概観しよう。「キリスト教徒」という名称が初めて呼ばれた地であり<sup>56</sup>、最初期からキリスト教共同体を擁していたアンティオキアもまた、コンスタンティヌス帝以降、帝国キリスト教の正統教理論争や主導権争いに身を投じることになる。その具体的な発露は、テオドレトスの生涯に関していえば、ネストリオス論争という形をとった<sup>57</sup>。428年、北シリアのゲルマニケイア（現カフラマンマラシュ、トルコ）出身の新任コンスタンティノポリス大主教ネストリオスが、マリアを「神の母（テオトコス）」ではなく「キリストの母（クリストコス）」と呼ぶべきであるという見解を公にした。それは「アンティオキア派」のキリスト論に基づくものであった。すなわち彼は、不受苦の神が、出生から死に至るまでの苦しみ＝情動（パトス）を受ける、完全な人間本性を併合してイエス・キリストとなったことに救済論的意義を見出したため、「神の母」という称号に忌避感を覚えたのであった<sup>58</sup>。しかしこれは、アレクサンドリア大主教キュロスの猛批判を呼び、ネストリオス

が異端者として告発される事態に発展する。キュリロスが唱えたのは、神なる御言葉まさにその方が、神性と人性との合一において、人間キリストとして到来したことを強調するものであった。その限りにおいて、「神の母」という称号を否定する方が異端となる<sup>59</sup>。彼の見解は、「神の母」という称号に日々の賛歌において既に慣れ親しんでいたエジプトの民衆や修道士たちの支持を得ていた。

事態収拾のために開かれたエフェソス公会議でネストリオスは一方的に断罪され、激怒したオリエンスの主教たちがキュリロスをこれまた一方的に異端宣告するなど紆余曲折の末、最終的に「神の母」という称号が認められ、ネストリオス独りが異端宣告を受け失脚することとなった(431年)。アンティオキア大主教ヨアンネスは穏健派としてアレクサンドリアのキュリロスとの間に双方納得しうる「合同信条」を採択することで手を打った(433年)。テオドレトスは既にキュリロスのネストリオスに対する十二か条の異端宣告に逐条的な反駁を著わしていたが、この合同信条を起草したのも彼であった<sup>60</sup>。こうして彼はアンティオキア側、オリエンス側を代表する論客として姿を現す。

「合同信条」の後にも双方の強硬派を中心にわだかまりは残る。それを追い風に、アレクサンドリアのキュリロスは438年以降アンティオキア側への非難を再開する。具体的には、ネストリオスの師であるモプスエスティア(キリキアの都市、現トルコ南部)主教テオドロスと、そのまた師であるタルソス(キリキアの首府、現タルスス)主教ディオドロス(330頃-390以降)という故人たちを槍玉に挙げるという形を取った。彼らはいずれも主教叙任までをアンティオキアで過ごした、「アンティオキア派」と呼ばれる教理・聖書積義上の潮流の代表者であった。

440年代に入ると、アンティオキアのヨアンネス(442年)、アレクサンドリアのキュリロス(444年)と相次いで「合同信条」の当事者たちが没する。アレクサンドリア大主教位を継いだディオスコロスは、前任者に輪をかけて激しい人物で、皇帝テオドシウス2世に近い修道院長エウテュケスと結び、先鋭化したキュリロスのキリスト論を唱導し、主導権を掌握しにかかる。テオドレトスはこれに対話篇『エラニステス』(*Eranistes*)等によって反駁を加え、抵抗したが、アレクサンドリア側の主導で開かれた第二エフェソス会議(449年)においてアンティオキア大主教ドムノスらと並びネストリオス派異端として破門されてしまう。テオドレトスはローマ大司教(教皇)レオ1世等、皇姉ブルケリアや高官らに支援を求めて大量の書簡を書き無実を訴える。しかし情勢を変転させたのは皇帝テオドシウスの急死(450年)であった。451年にはブルケリアと、彼女と結婚した新帝マルキアヌスによりカルケドン公会議が開かれ、レオ1世の教書と主教たちの協議に基づき「合同信条」を発展させた「カルケドン信条」が採択された。テオドレトスらアンティオキア側の神学者たちは復権し、アレクサンドリア大主教ディオスコ

ロス以下は追放されることとなった。しかし公会議での様子やのちの著作から推し量る限り、復権後のテオドレトスの立場もさして盤石とは言えなかったようである。いくつかの著作を書いた後、テオドレトスは歴史から姿を消す。死去はおそらく458年頃のことであった。

## 2.2. テオドレトスの「シリア語」言及とその戦略的意図

テオドレトスを取り巻いた歴史の中に、前述の諸著作はどのように位置付けられるであろうか。先行研究として、Sillettによる『敬神者列伝』の分析を切り口としよう。

Sillettは教会史史料や修道士伝を分析し、ネストリオス事件以降キュリロスを含めたエジプト側がシリアの神学、修道文化、正統性等の総体に疑いを向けていたとする。それは修道生活をめぐるシリアの風習にも向けられた<sup>61</sup>。これに対しテオドレトスは、シリアの修道士たちの生涯を記述することでシリア文化のヘレニズム文化との両立可能性を証明しようとした。それはシリア文化全体を周縁化しようとするような動きに抵抗し、修道士たちをペルシア<sup>62</sup>との前線における正義と秩序の守り手として描き出す試みであった<sup>63</sup>。そのためにテオドレトスは二つの文化の調和を体現する個人という自画像を描いた<sup>64</sup>。440年という著作の年代は確かに、キュリロスがネストリオス個人の問題を越えてその先駆者たちを非難し始めた時期と一致する<sup>65</sup>。

テオドレトスからしてみれば、キリスト教的シリアの正統性を強調すると同時に、修道士たちおよび彼らを崇敬する人々の支持を得たいという意図もあったと考えられる<sup>66</sup>。公会議史料などから読み取る限り、「合同信条」前後までのテオドレトスは既にギリシア語話者のエリート主教団とつながりを持っていたようだが<sup>67</sup>、シリア文化とヘレニズム文化の融和という枠組みにおいては、北シリアの山間部やエウフラテス川以東の修道士たちとの関係も強化できる。その限りにおいて、Sillettはテオドレトスによるシリア語の称揚を強調するが、筆者の考えでは、前述した「マルキオン派の悪魔」の挿話は別の側面を提示する。シリア語で夢を見たと言ってもそれを話したのは「異端」を操ってキュロスの街に蔓延させる「悪魔」であった。この挿話のあと、テオドレトスは自らマルキオン派を教化しに行き、彼らがあがめる蛇の銅像を見た、という記述を続ける<sup>68</sup>。焦点は一貫して、テオドレトス自身の「異端」との戦いと、それに対する修道士ヤコブの佑助に当たっている。前述した通りここでシリア語はむしろ否定的な位置に置かれている。しかしこれもテオドレトスの同じ戦略に置いて説明できる。彼はキュロスのマルキオン派がシリア語話者のうちに広がっていることをよく知ったうえで、別世界から来た主教としてではなく、彼らの言語を解し、シリア語話者の修道士と交流し、自ら「異端」を改宗させに行く仲介者として自らを描写しようとしているのである。

他の著作に関してはどうか。『治癒』は前述の通りかなり初期の著作とされている。テ

オドレトスが未だシリア世界との協調を演示する動機を持たなかったと仮定すれば、「ギリシア語以外の言語」リストの中にシリア語が入っていないことにも得心がいく。

註解的著作は数多く、430年前後から448年の間に著されたと考えられる<sup>69</sup>。聖書本文の適切な理解という確固とした動機があるからには、Sillettが提示したようなシリア世界との協調という目的を見出す余地はさほど無い。とはいえ、テオドレトスのシリア語に対する積極的な態度が、それが稀であるとはいえ、「アンティオキア派」の先人たる解釈者モプスエスティアのテオドロスが示したシリア語聖書に対する反感と対照的であることは特筆に値する<sup>70</sup>。『創世記質疑集』を含む『八書質疑集』はカルケドン後の453年に著されたものである。簡単に言及したとおり、キュリロス死後もカルケドン公会議後もテオドレトスのシリア・アンティオキア擁護戦略は続いたと想定できる。440年代末に著した『教会史』(*Historia ecclesiastica*)でテオドレトスは、アレクサンドリアをアレリオス以来の諸騒動の根源として、他方アンティオキアを正統信仰者たちの牙城として描くため、記事をしばしば年代順から組み替えて配置した<sup>71</sup>。453年に著した『真偽の弁別』(*Falsi verique distinctio*)<sup>72</sup>においてテオドレトスは、諸異端の祖を『使徒言行録』に現れるシモン・マゴスと措定する異端教説史の伝統を破った。彼は各巻ごとに主題を設定し、それに属する「異端」を該当する巻に配置するやり方を採用した。そして1巻と2巻の主題をそれぞれ仮現論、養子論というキリスト論に関わるものに設定し、両者の祖を使徒時代にまで遡らせた。異端史それ自体をアンティオキア神学の正統性弁明としたのである<sup>73</sup>。言語それ自体を称揚する文言を含むという意味では最も「親シリア的」な記述が見られる『創世記質疑集』がこの最晩年、『真偽の弁別』と同じ年に現れていることを考えると、その記述を素直に受け取るわけにはいかなくなる。テオドレトスはヘブライ語を二次学習的な「聖なる言語」としたうえで、最古の口語にシリア語を位置づけた。世界最古と言っても口語である限りは、それを通じて聖書の神秘を解明できる特別な言語——ヘブライ語——の位置を与えられたわけではない。それは救済史の最初期の局面に登場するアダム、カイン、ノアの名前を説明しうる言語である。まずこのような聖書時代からの連続性が意図されていると言ってよいだろう。他方テオドレトスが挙げる他の集団ごとの口語を見てみると、順にイタリアの言葉(=ラテン語)、ギリシア語、ペルシア語、エジプト語となる。それぞれローマ帝国全体の行政言語、帝国東半の文化言語、「敵国語」、ライバル地域の言語という意味深長な順番で並べてある、と見るのは穿鑿しすぎだろうか。少なくともSillettによればテオドレトスはシリアをローマとペルシアの間をつなぐ土地として、そして修道士ヤコブを国境最前線で宣教しつつ祈りによってペルシアのニシビス攻囲を撃退する「辺境の担い手」として描き出そうとしていた<sup>74</sup>。ここに現れる諸言語は、本稿1章1節で言及した『治癒』のそれとは違ってシリアを取り巻く諸文明の言

語である。テオドレトスは同時代のローマ＝キリスト教的世界像の中でシリア語を押し上げようと努力していると考えられるのである。他方この一節ではギリシア語は単なる一口語として言及されるが、著作自体は相変わらず明瞭なギリシア語で記される。この限りでは、テオドレトスはギリシアとシリアの調和を体現しうる存在として振舞っている。『列伝』の戦略はこの時期に至っても続いていたと見るべきだろう。

以上から、テオドレトスの「親シリア的」言及に戦略的な動機があったこと、従来素朴にシリア語母語説の根拠として示されてきた諸記述の各々もそれに対応した形で現れていることは、十分に明らかになったと思われる。実際にテオドレトスは、それが具体的に奏功したかどうかはさておき、著作を戦略的な意図に基づいて組み上げる人物であったことを筆者は強調したい。シリア語という主題から外れるため上では割愛したが、Sillettの分析によれば、シリア修道士たちは修行を通してアンティオキア的人間本性論を実証する存在としても描かれている<sup>75</sup>。しかし当の修道士たちが予めかかる神学的議論を踏まえて修行していたとは考えにくく、むしろテオドレトス自身が解釈してかかる説明を加えたのだろう。アンティオキアの両性論と同様に、シリアの修道文化やシリア語聖書本文は正統キリスト教世界に貢献しうる。それをローマ＝キリスト教世界に対してアピールし、よき返事を得るために用意した一つの装置が、シリア語だったのである。

## むすび

史料の制約上、テオドレトスの母語を確定することは困難である。しかし少なくとも従来用いられてきた資料を基にそれをシリア語と判断するのは危険である。またシリア語を十分使いこなせたとする史料も充分ではない。テオドレトスがある程度シリア語を扱えたことは否定できないとしても、むしろ優勢言語としていたのは一貫してギリシア語であった、と筆者は判断する。むしろ、シリア語への言及が彼の著作の特徴をなすことも否定できない。しかしその背後にある言語文化的文脈とテオドレトスの進退窮まった状況に鑑みれば、それは母語・生得言語への自然な言及などではなく、テオドレトス自身一目置く一つの文化圏との協力関係を補強するための行為であったと結論付けることができよう。テオドレトスの著作に見える言語的状况は、単なる接触の痕跡でも母語の発露でもなく、戦略の賜物であった。

最後に Canivet による「民族語」という表現に一言触れておきたい。Canivet 自身、古代末期アンティオキアの住民を「言語と起源の点でのコスモポリタン」<sup>76</sup>と説明したが、「民族語」たるシリア語と「普遍文明語」(Canivet がそう言うてはいないにせよ)としてのギリシア語を対置していることも確かである。言語と文化、思考のつながりは、それを重視するか軽視するか

を含めて、様々な議論を呼びうる。「民族の」という形容詞は、近代的なネイション理念を通じて、ある言語を用いる集団が内外に対するアイデンティティーを共有していたかのような印象を与え、エウフラテス以西以東という地域差やその中のより微細な社会的階層なども無化してしまう。シリアの問題については Millar を参照してもらうこととして、「民族」理念をめぐる問題一般については、著者の力量と紙幅のためにこれ以上立ち入れない。

しかしかかる見方が歴史的事象を判断するとき一種の色眼鏡として機能することを述べておく必要はあろう。例えば、我々のテオドレトスがかろうじて正統と認められたカルケドン公会議で、反対に「異端」とされた勢力は非カルケドン派と称される教派を形成し、エジプトやシリア、アルメニアで抵抗を続けた。エジプトの場合、こういったカルケドン派と非カルケドン派の対立の背景として、伝統的に、前者と結びつく「ギリシア人」と後者に結びつく「コプト人」≒「土着エジプト人」との対立が措定され、後者の宗教的、民族的、美術的アイデンティティーが強調されてきたという<sup>77</sup>。ところが貝原によれば、史料を精査する限り、この対比を読み取れるかどうか疑わしい。むしろ、彼は指導者の使用言語や行政言語、混血の観点から、「古代末期のエジプトでは、コプト人のあいだに反ギリシア的ナショナリズムなど存在しなかった」<sup>78</sup>と結論付ける。ここで問題となるのは、言語・文化を区切る補助線が容易に引かれ、伝統的言説を形作ってきた点である。テオドレトスの場合にも、シリア語とギリシア語とをいかに対置するか、母語をめぐる議論をどう扱うかにはいくら慎重を期してもしすぎることはないだろう。「ヘブライズムとヘレニズム」のような、言語と思考の一体性を強調する言説に対しても同じことが言える。

二つの言語集団が近接する中で、教理と伝統の正統性を構築し、そこに様々な集団を包摂して位置付けていくレトリックこそが、テオドレトスの著作を読み解くうえで最も注目すべき要素である。テオドレトスは自分自身を調和のための核として、シリア語に積極的に言及しながらギリシア語でそれを遂行した。ギリシア語の子でありながら、「民衆的で实际的な」言語を自身の世界像、正統キリスト教的シリアの伝統のうちに取り込もうとした。その限りで彼は、古代末期からビザンツ世界へと連綿と続いたたかな書き手の一人に留まっているのである。

#### 《辞書・叢書類》

*BDB* Brown, F., Driver, S., and Briggs, C., eds. *The Brown-Driver-Briggs Hebrew and English Lexicon: with an appendix containing the Biblical Aramaic* Massachusetts: Hendrickson Publishers, 1906. Reprint, 7th ed., 2017.

*GEDSH* Brock, S. P., Butts, A. M., Kiraz, G. A. and Van Rompay, L., eds. *Gorgias encyclopedic dictionary of the*

- Syriac heritage*. Piscataway, N.J.: Gorgias Press, 2011.
- PG Migne, J. P. ed. *Patrologia Graeca*, 162 vols. 1857–66.
- TS Payne Smith, R., ed. *Thesaurus Syriacus*, 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1879–1901.
- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編著『言語学大辞典』三省堂, 1988–2001.
- 《一次文献》
- Egeria, *Itineraria*: Maraval P., éd. *Journal de voyage*. Paris: Les Éditions du Cerf, 1982. Reprint, 1st ed., 2002.
- Plato, *Respublica*: Slings, K., ed. *Respublica*, Oxford: Clarendon press, 2003.
- Theodore of Mopsuestia, *Commentarius in XII prophetas*: Sprenger, N., ed. *Commentarius in XII prophetas*. Wiesbaden: Harrassowitz, 1977.
- Theodoret of Cyrillus, *Historia religiosa*: Canivet P., Leroy-Molinghen A., éd. *Histoire des moines de Syrie : Histoire Philothée*. Paris: Éditions du Cerf, 1977.
- , *Graecorum affectionum curatio*: Raeder, I., hrsg. *Graecorum affectionum curatio*. Lipsiae: Teubner, 1904.
- , *Historia ecclesiastica*: Parmentier, L., hrsg. *Kirchengeschichte*. Leipzig: Hinrichs, 1911.
- , *Falsi verique distinctio*: Gleede, B., hrsg. *Unterscheidung von Lüge und Wahrheit*. Berlin, Boston: De Gruyter, 2020.
- , *Quaestiones in Octateuchum*: Hill, R. C., ed. *The Questions on the Octateuch*, 2 vols. Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 2007.
- 《二次文献》
- Canivet, P., « Histoire d’une entreprise apologétique au Ve siècle ». PhD diss., Université de Paris, 1958.
- Chadwick, H., “Eucharist and Christology in the Nestorian Controversy”. *The Journal of Theological Studies*, II (2), 1951, 145–164.
- Crego, P., “A Translation of and Commentary on Theodoret of Cyrus’ *Graecorum Affectionum Curatio*: Book Five, On Human Nature”. PhD diss., Boston College, 1993.
- Festa, N., cur. *Teodoreto: Terapia dei morbi pagani*. Firenze: Edizioni “Testi cristiani”, 1931.
- Guinot, J., *L’exégèse de Théodore de Cyr*. Éditions Beauchesne, 1995.
- Harvey, Susan Ashbrook, “The Sense of a Stylite: Perspectives on Simeon the Elder”, *Vigiliae Christianae* 42: 4, Leiden: Brill, 1988, 376–394.
- Hill, R. C., *Reading the Old Testament in Antioch*. Leiden, Boston: Brill, 2005.
- Millar, F., “Theodoret of Cyrillus: a Syrian in Greek Dress?”, in *From Rome to Constantinople: Studies in honour of Averil Cameron*, eds. H. Amirav and B. Ter Haar Romeny, Leuven, Paris, Dudley, MA: Peeters, 2007, 105–125.
- Papadogiannakis, Y., *Christianity and Hellenism in the Fifth-century Greek East: Theodoret’s Apologetics Against the Greeks in Context*. Washington, D.C.: Center for Hellenic Studies, 2012.
- Pásztori-Kupán, I., *Theodoret of Cyrus*. London, New York: Routledge, 2006.
- Price, R. M., *Theodoret of Cyrillus: A History of Monks of Syria*. Kalamazoo, Michigan: Cistercian Publication, 1985.
- Schor, A. M., *Theodoret’s People: Social Networks and Religious Conflict in Late Roman Syria*. University of California Press, 2011.
- Sillett, H. M., “Culture of Controversy: the Christological Disputes of the Early Fifth Century”. PhD Diss., in University of California, Berkeley, 1999.
- Tanaka, H., “Orthodox Emperors and Propaganda in Theodoret’s Ecclesiastical History”, in *New Approaches to the Later Roman Empire*, T. Minamikawa, ed. Kyoto University, 2015, 85–102.
- Taylor, D. G. K., “Bilingualism and Diglossia in Late Antique Syria and Mesopotamia”, in *Bilingualism in Ancient So-*

- ciety: Language Contact and the Written Word*, ed. J. N. Adams, M. Janse, & S. Swain, Oxford: Oxford University Press, 2002, 298–331.
- Ter Haar Romeney, B., *A Syrian in Greek Dress: the Use of Greek, Hebrew, and Syriac Biblical Texts in Eusebius of Emesa's Commentary on Genesis*, Peeters: Leuven, 1997.
- Urbainczyk, T., *Theodoret of Cyrrhus. The Bishop and the Holy Man*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2002.
- Vranic, V., *The Constancy and Development in the Christology of Theodoret of Cyrrhus*. Leiden, Boston: Brill, 2015.
- アマン, A. 『アウグスティヌス時代の日常生活』 上下巻、東丸恭子訳、リトン、2001–2.
- 秋山学 『アレクサンドリアのクレメンス 綴織』 1–2 巻、教文館、2018.
- 太田強正訳 『エゲリア巡礼記』 サンパウロ、2002.
- 貝原哲夫 「6–7 世紀エジプトにおける宗教的対立とその展開——地域的視点に立脚して——」 博士学位論文、大阪市立大学、2014.
- 田中美知太郎、藤沢令夫訳 『プラトン クレイトポン・国家』 プラトン全集 11、岩波書店、1976.
- 武藤慎一 『聖書解釈としての詩歌と修辞——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』 教文館、2004.
- メイエンドルフ, J. 『東方キリスト教思想におけるキリスト』 小高毅訳、教文館、1995.
- 湯川笑子 「バイリンガルの言語喪失を語るための基礎知識」 『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』 第 1 号、1–24、2005.

---

\* 本研究は JSPS 特別研究員奨励費 19J21033 の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> アマン 『アウグスティヌス時代の日常生活』 84–9 頁。

<sup>2</sup> 古典ギリシア語に忠実に転写すればテオドレートスとなるが、ここでは慣例に従って長母音を省略し、テオドレトスと表記する。

<sup>3</sup> Butts, A. M., s.v. “Syriac language”, *GEDSH*, 390–1.

<sup>4</sup> 本稿では当時のシリア地域で口語として用いられたと想定されるアラム語およびシリア語の変種をも含めてシリア語と呼ぶこととする。また当時のシリア地域における言語使用については、Taylor, “Bilingualism and Diglossia”, 4ff. を参照。

<sup>5</sup> Canivet, « Histoire d'une entreprise », 24, 27.

<sup>6</sup> Canivet が « national » という形容詞によって何を含意しているかを一義に確定することは容易ではないが、少なくとも « des Syriens de nationalité » という表現が見られるため (24, n. 6)、それが具体的にいかなる集団を想定しているかはともかく、「民族 (の)」という訳語を充てることに問題はないと考えられる。

<sup>7</sup> 例えばエメサのエウセビオスは、シリア語母語話者でありながら、ギリシア語で主に聖書釈義書を著した。しかしその著作はギリシア語でほとんど残っていない。エウセビオスの言語的経歴に関する研究については、Ter Haar Romeney, “Syrian in Greek Dress?” を参照のこと。なお後述する Millar 論文の論題とタイトルは、Ter Haar Romeney のそれを踏まえたものとなっている。

<sup>8</sup> とりわけ聖書釈義の研究者がこれに依拠する傾向にある。例えば Guinot, *L'exégèse de Théodoret*, 195; Hill, *Reading the Old Testament*, 8 など。邦語文献では、武藤もテオドレトスの母語をシリア語とし、そのために分析対象から外している。武藤 『聖書解釈としての詩歌と修辞』 17, 36 頁。

- <sup>9</sup> Millar, “Theodoret of Cyrrhus”, 124–5.
- <sup>10</sup> Canivet, « Histoire d’une entreprise », 25, n. 1.
- <sup>11</sup> 上掲項目の執筆者は、この native language 概念が母語 mother tongue とは異なると説明しつつ、日本語では「母語」としか訳せないとしていたため、便宜的に筆者が訳語を付けた。
- <sup>12</sup> 以下の諸概念については、「母語」『言語学大辞典 第6巻 術語編』1304–6頁に基づく。
- <sup>13</sup> Guinot, *L’exégèse de Théodoret*, 195ff.
- <sup>14</sup> *Curatio*, V. 72–4.
- <sup>15</sup> *Ibid.*, V. 75: Καὶ ταῦτα λέγω οὐ τὴν Ἑλλάδα συμκρύνων φωνήν, ἧς ἀμηγήπη μετέλαχον, οὐδὲ ἐναντία γε αὐτῆ ἐκτίνων τροφεῖα, ἀλλὰ ..... κ.τ.λ.
- <sup>16</sup> Festa, *Terapia*, 18–9.
- <sup>17</sup> Canivet, « Histoire d’une entreprise », 25.
- <sup>18</sup> Parmentier, *Kirchengeschichte*, XCIX.
- <sup>19</sup> Guinot, *L’exégèse de Théodoret*, 195ff.
- <sup>20</sup> Urbainczyk, *Theodoret of Cyrrhus*, 16–8.
- <sup>21</sup> Festa, *Terapia*, 18.
- <sup>22</sup> 74節でテオドレトスは、ラテン語を理解する集団から自身を除外するような書き方をしており、ラテン語を解さなかった証拠の一つとなっている。
- <sup>23</sup> *Respublica* VII, 520B: αὐτόματοι γὰρ ἐμφύονται ἀκούσης τῆς ἐν ἐκάστη πολιτείας, δίκην δ’ ἔχει τὸ γε αὐτοφυῆς μηδενὶ τροφὴν ὄφελον μηδ’ ἐκτίνειν τῷ προθυμῆσθαι τὰ τροφεῖα. 傍線は筆者によるもので、『治療』の一節と語彙の点で並行している箇所を示している。
- <sup>24</sup> *Ibid.*, VII, 520A–C. また藤沢訳『国家』504–6。
- <sup>25</sup> 444年説と440年説があるが、ここでは後者を採る。Price, *History of monks of Syria*, xiv–vを参照のこと。
- <sup>26</sup> テオドレトスの母親はマケドニオスに食事を提供するなど一種のパトロネスとなっており、代わりに霊的庇護、具体的には子宝のための祈りを依頼するなどしていたようである。*curatio Religiosa*, 13.3および16を参照のこと。
- <sup>27</sup> *Ibid.*, 13.16.
- <sup>28</sup> *Ibid.*, 13.7.
- <sup>29</sup> Millar, “Theodoret of Cyrrhus”, 118–9.
- <sup>30</sup> 『敬神者列伝』に描かれる修道士たちの中には、例えばプープリオスのようにギリシア語を習得した者もいた（『敬神者列伝』5章を参照のこと）。しかしそれはあくまで特殊な例で、ほとんどはシリア語のみを解する人物であり、テオドレトスもギリシア語を話せる人物に限らず広く修道士たちと交流した。
- <sup>31</sup> *Historia religiosa*, 21.15.
- <sup>32</sup> このことはこの挿話が作り話であれ真実であれ妥当すると筆者は考えている。ある言語（ここではギリシア語）の担い手に向けた文章において、夢の登場人物(?)が別の言語（ここではシリア語）で語りかけてきた、という挿話を発想すること自体が、たとえ他に意図があるとしてもある程度バイリンガルの人物でないと不可能なものだと思われるからである。
- <sup>33</sup> 後代に標準となったベシッタ版シリア語訳聖書との関係については、Guinot 1995, 188–90を参照のこと。
- <sup>34</sup> Canivet, « Histoire d’une entreprise », 26.
- <sup>35</sup> Guinot, *L’exégèse de Théodoret*, 195ff.
- <sup>36</sup> Millar, “Theodoret of Cyrrhus”, 123–4.
- <sup>37</sup> *PG* 80, 529A.
- <sup>38</sup> *PG* 80, 857A. また4世紀後半に東地中海地方の巡礼記録を遺したエゲリアは、『巡礼記』(*Itineraria*) 11章において、義人や聖人ゆかりの地に到達するたびそれに該当する「モーセの諸書」に加えて詩篇を一篇

朗唱する習慣について書き残している。

<sup>39</sup> Guinot, *L'exégèse de Théodoret*, 842. なお、以下詩篇番号は七十人訳番号で示し、それとヘブライ語詩篇番号およびそれから訳された日本語訳聖書の詩篇番号が異なる場合には、括弧の中に後者を明記することとする。またテオドレトス『詩篇註解』の箇所は PG 80 のコラム番号と行の位置を示すアルファベットで示す。

<sup>40</sup> PG 80, 1528A.

<sup>41</sup> BDB, s.v. “עַתָּה”, 773.

<sup>42</sup> TS, t. II, s.v. “עַתָּה”, 2812.

<sup>43</sup> Ibid., 1841 B–C.

<sup>44</sup> *Quaestiones in Octateuchum, in Gen.*, q. 60.

<sup>45</sup> Crego, “Translation”, 8; Millar, “Theodoret of Cyrrhus”, 124.

<sup>46</sup> Crego, *ibid.*

<sup>47</sup> *Quaestiones in Octateuchum, in Gen.*, q. 61.

<sup>48</sup> Canivet, « Histoire d’une entreprise », 25.

<sup>49</sup> Ibid., 125, n. 1.

<sup>50</sup> 『敬神者列伝』の文体を、他の修道士伝の文体と比較した Harvey, “The Sense of Stylite”, 378 および Sillett, “Culture of Controversy”, 85 等を参照のこと。

<sup>51</sup> Crego, “Translation”, 8–9.

<sup>52</sup> この点に関して、筑波大学大学院の新山聖也氏から、「言語喪失」と呼ばれる現象があることをご教示いただいた(湯川「バイリンガルの言語喪失を語るための基礎知識」を参照のこと)。史料の状況から言って、テオドレトスが蒙ったかもしれない言語喪失について考察することは不可能に近い。しかしこの現象を念頭に置くことで、母語 / 学習言語という二者択一の根本的な危うさを指摘しうるかもしれない。氏の教示に感謝申し上げる。

<sup>53</sup> 武藤『聖書解釈としての詩歌と修辞』38 頁。

<sup>54</sup> Millar, “Theodoret of Cyrrhus”, 108ff.

<sup>55</sup> オリエンズ管区 (diocesis Orientis) とは、後期ローマ帝国の地方行政区分の一つで、より上位のオリエンズ道 (ordo Orientis) の一区画を成し、キリキア、シリア、パレスティナ等を含んでいた。首府はシリアのアンティオキアで、オリエンズ総督 (comes Orientis) が統治した。教会組織も原則として行政区分に基づいてその管轄地を定めたため、アンティオキア大主教 (総主教) がオリエンズ管区 (教区) の教会と主教を統轄した。以下「オリエンズ」とはオリエンズ管区 (教区) のことを指す。

<sup>56</sup> 『使徒言行録』11 章 26 節。

<sup>57</sup> 以下、テオドレトスの生涯とネストリオス論争の経緯については、Sillett, “Culture of Controversy”, 5–56; Pásztori-Kupán, *Theodoret of Cyrus*, 3–27; Vranic, *Constancy*, 15–70 を参照。

<sup>58</sup> メイエンドルフ『東方キリスト教思想におけるキリスト』37–40 頁。

<sup>59</sup> 同上, 40–5 頁。

<sup>60</sup> Chadwick, “Eucharist”, 3.

<sup>61</sup> Sillett, “Culture of Controversy”, 71–2.

<sup>62</sup> 当時の「ペルシア」とはサーサーン朝で、自称をエーラーン・シャフルとしていたが、ギリシア・ローマ圏ではペルシアと呼ばれていた。本箇所というペルシアも、現在のファールス州に当たる元来の「ペルシア」だけではなく、メソポタミアやアディアベネをも包括する呼称である。

<sup>63</sup> Sillett, “Culture of Controversy”, 75–86.

<sup>64</sup> Ibid., 86ff.

<sup>65</sup> Ibid., 58–9.

<sup>66</sup> Urbainczyk, *Theodoret of Cyrrhus*, 148–52.

<sup>67</sup> この時期を含め、ネットワーク理論を用いてテオドレトスの書簡を分析し、その人脈形成と維持の経緯を明らかにした研究として Schor, *Theodoret's People* を見よ。

<sup>68</sup> *Historia religiosa*, 18 におけるマルキオン派の描写を参照。

<sup>69</sup> Guinot, *L'exégèse de Théodoret*, 48–71, 特に 62–3 の図を参照。

<sup>70</sup> Theodorus Mopsuestenus, *Commentarius in XII prophetas, in Zeph. 1; 4–6* (Sprenger 1977, 283. 20–284. 11).

<sup>71</sup> Tanaka 2015 を参照のこと。

<sup>72</sup> 従来『異端謬説要略』(*Haereticarum fabularum compendium*)と呼ばれてきた全5巻の著作だが、この題はテオドレトス自身がその序文で付けた1巻から4巻までの名称に基づくものであり、同じく彼自身が5巻を加えた全体の題名として示した『真偽の弁別』(*Ψεύδους και ἀληθείας διάγνωσις*)を採用すべきである(*Distinctio, Praefatio. 5*)。今年その新たな校訂本を公にした Gleede も、後者を著作の題名として採用している。なお本稿におけるラテン語題 *Falsi verique ditinctio* は、J. L. Schulze の訳から筆者が採用したものである(*PG 83, 339*)。

<sup>73</sup> Sillett, “Culture of Controversy”, 153–64.

<sup>74</sup> *Ibid.*, 103–8.

<sup>75</sup> *Ibid.*, 119–39.

<sup>76</sup> Canivet, « Histoire d'une entreprise », 23.

<sup>77</sup> 貝原「6–7世紀エジプトにおける宗教的対立とその展開」11–2頁。

<sup>78</sup> 同上, 17頁。

## **Re-thinking of the role of “Syriac language” in the writings of Theodoret of Cyrhus**

**SUNADA Kyosuke**

Theodoret, bishop of Cyrhus in Syria, was one of excellent theologians in his age. He has also been recognized for his knowledge of classical Greek, in which he produced vast writings, even though Syriac was his mother tongue by relying on some accounts of Theodoret himself (Canivet, 1958). Canivet and some researchers consider he was master of Syriac language as a native speaker and Greek was the learned language for him. Millar (2007), however, criticized this opinion and emphasized the importance of Greek for disclosing his identity. Nevertheless, the basis of his argument rests on linguistic history in Syria and not the accounts of Theodoret himself. Thus some of the crucial issues remain unresolved. This paper aims to reconsider those accounts and to redisplay the personal portrait of Theodoret, one of the most influential writers in the 5th-century Mediterranean world.

The first chapter contains an analysis of several accounts which, insofar as some researchers regard, relating to his native language; namely, 1) book 5 of *Graecarum Affectionum Curatio*, 2) *Historia Religiosa*, and 3) exegetical writings in the Old Testament. The opinion that these are valuable sources by which to judge the writer’s mother tongue remains doubtful. These accounts, rather, seem to show that his dominant language was Greek. Contrary to the opinion of Canivet and Guinot (1995), according to my analysis, Theodoret intentionally expressed pro-Syriac sentiments through these descriptions.

Chapter Two collates these each account in the region’s ethnolinguistic history of Syria and the career of Theodoret himself as a bishop, with presenting a more strategic image of Theodoret. In earlier sources, Theodoret emphasized his ability in and commitment to classical Greek. In accounts in the 440s, the author took the opportunity to mention pro-Syriac episodes or references in *Historia Religiosa*. And, after the council of Chalcedon (451), at last, he declared the Syriac language to be the oldest spoken language. This timeline corresponds to the situation of the churches in Antioch and Syria, which Cyril of Alexandria aggressively criticized during the Nestorian controversy. Through the medium of the Syriac language, he both proclaimed innocence for Syrian monastic culture as a whole and called for the help of the Antiochene episcopal faction in the Syriac world.

The problem of his mother tongue or spoken language has often attracted the attention of historians

of early Christianity, studies on biblical exegesis, etc. Theodoret, however, attempted to introduce the special relationship between Syriac language and himself to classical Greek texts strategically, but not naturally, as a native speaker would. This paper demonstrates the need to consider the rhetorical strategy of this writer—who may have been a sincere person, but not neutral.